

65 に見ゆ。

(55) *bošqut*. 此の語はミューラー氏が「教へたる」(*gelehrt*)と譯し、ラドロフ氏が之を否みて『從來知られざる語なれども、其の語原なる *boškun* は「十分に學ぶ」「暗記する」(*auswendig lernen*)の意なるべしと説けるものなり (*Ṭiṣastvustik*, S. 54)、ミューラー氏も後に之に従ひしが如く *Uigurica*, II, S. 34 には、*bosqunqu* なる語に「學び」(*lernen*)なる譯を施せり、されど此處にては「學ぶ」の意と解しては語を成さず。

(56) 第七識の名は原文と合せず、原文には、含藏識・阿頼耶識を以て第七・八の兩識とせり、されど、元來含藏識とは阿頼耶 (*ālaya*) 識の譯語にして、此の兩者を別にすべき理由なし、譯文には *adīra tip tutuqlī bilig* (*adīra* といふ執識) なる語を第七識に當てたり、思ふに *adīra* は阿陀那にして「眞諦云・六識如常・第七阿陀識・此云執識・以是惑性常有執故・唐三藏云・阿陀那者・此云執持・執持諸法種子故・及是第八之異名也・眞諦謬釋也」(枳橘易土集)と見え舊新兩譯家によりて或は第七識とし、或は第八識として數へられたるものなりとす、されば譯者もまた舊譯家の考に従がひ、原文に據らずして此の名を擧げたるものなるべし、而して原文の含藏識に對しては、次の *arīlīr kömsü bilig* なる語を當てたるなり、此の語は第三百五十二行には *kömsü aqīlīr bilig* として前二語の位置を變じたれども、*kömsü* も *arīlīr* も、等しく「藏むる」「含む」の義にして、これより庫・藏等の義にも用ゐらるゝ語なれば、翻譯の際何れを先きに記するも誤るなきなり。

(57) *yigād* はラドロフ氏が既に漢字の「勝」に對するものなるを指摘し、然も氏が知られざる語なるを記せるものにして (*Kuan-ši-im Pusar*, S. 66) ミューラー氏も亦た同義に解釋せり、此處にても等しく「勝」に對して用ゐたり。*ögürd* はラドロフ氏の方言集に *ökürt*-“泣く”“悲しむ”なる語あれど、此處にては當らず、*ö*-を語根として *ö-g* “知識”なる語あれば、これも *ö*-より出で、“通智”の意に用ひたるなるべし、されど今此の語の構成を知らず。

(58) *bulunčsuz* は第百十一行及び第三百六十四行に「無所得」に當てたり、而して「無邊」に對しては第百十行に *bulungsuz* と記せり、*bulung* は先きに註したるが如く、常に「隅・方・邊」の義に用ひらるゝ語にして、*bulunč* とは其の義異れり、されば此處の *bulunčsuz* は恐らくは *bulungsuz* の誤寫なるべし。

(59) *talīm* なる語については Müller 氏は *tala* より出でゝ「奪掠」の意を有する語なるべしと解けり (*Uigurica*, II, 81) *xara xuš* は「鷲鳥」(*Adler*) なれど現今東トルキスタンにて金鷲鳥 (*golden eagle = aquila chrysaetus*) を稱ぶ語なりといふ (*Shaw, A vocabulary of the language of E. T.*) 即ち「奪掠する(?)金鷲鳥」を以て「迦樓羅」(梵、*garuḍa* = 漢譯金翅鳥) を譯したるものなり。

(60) *kāntārvi* は乾闥婆 (*gandharva*) を寫したるものなること疑がふ可らず、さ